



「創造的復興リーディングプロジェクト」 における関係人口づくり

令和6年11月
石川県

石川県創造的復興プラン

(令和6年6月27日策定)



能登が示す、ふるさとの未来

Noto, the future of country

<創造的復興リーディングプロジェクト>

取組 1 復興プロセスを活かした関係人口の拡大

取組 2 能登サテライトキャンパス構想の推進

取組 3 能登に誇りと愛着が持てるような「学び」の場づくり

取組 4 新たな視点に立ったインフラの強靱化

取組 5 自立・分散型エネルギーの活用などグリーン
イノベーションの推進

取組 6 のと里山空港の拠点機能の強化

取組 7 利用者目線に立った持続可能な地域公共交通

取組 8 奥能登版デジタルライフラインの構築

取組 9 能登の「祭り」の再興

取組10 震災遺構の地域資源化に向けた取り組み

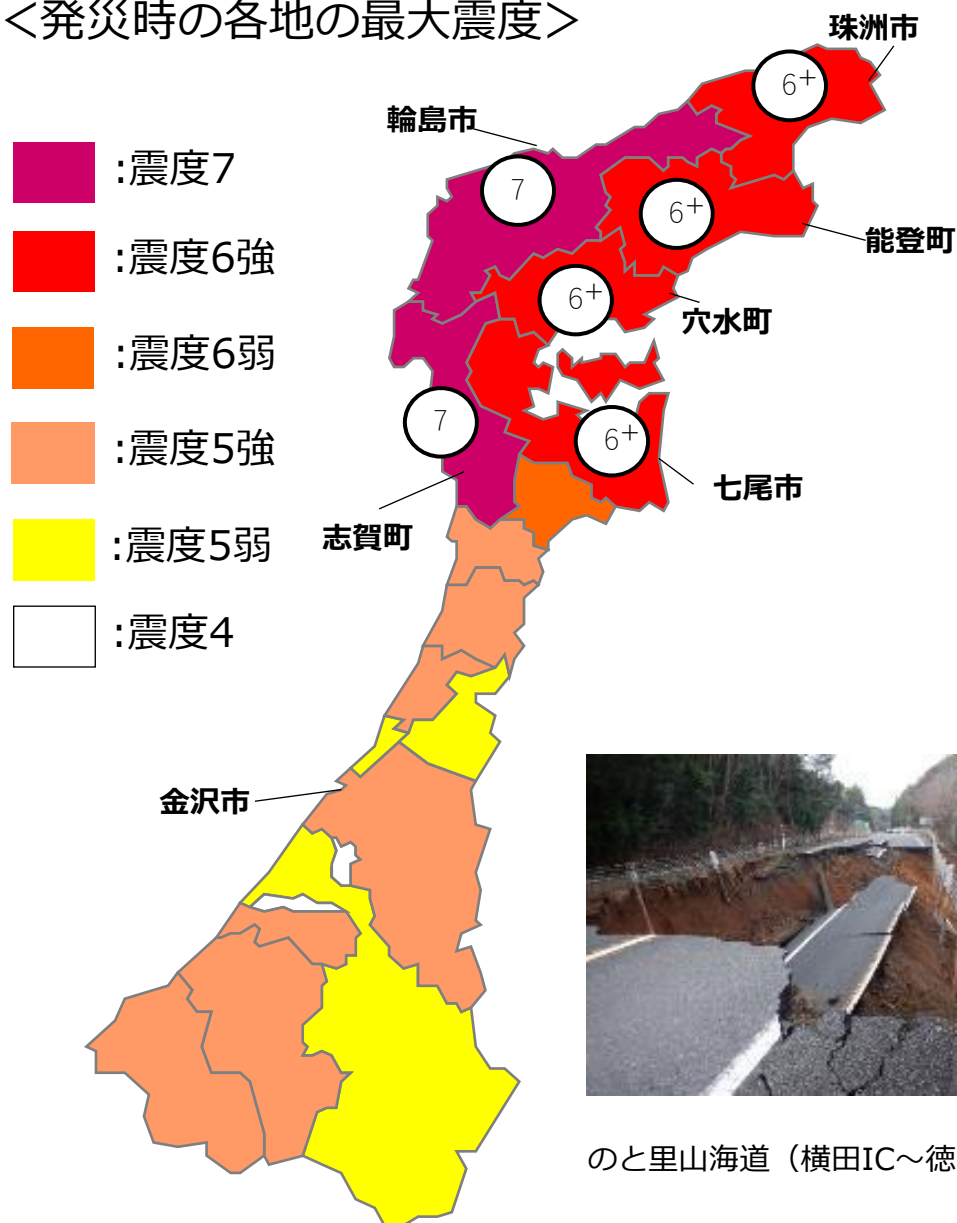
取組11 能登半島国定公園のリ・デザイン

取組12 トキが舞う能登の実現

取組13 産学官が連携した復興に向けた取り組みの推進

令和6年能登半島地震の概要

＜発災時の各地の最大震度＞



(令和6年10月15日14時時点)

○人的・住家被害の状況

死者 **408人** (うち災害関連死181人)
負傷者 **1,213人** (うち重傷337人)
行方不明者 **3人**
住家被害 **88,798棟** (うち全壊 6,058棟)

○避難者の状況

【最大】約34,000人

○道路被害の状況

奥能登への**幹線道路が寸断**

奥能登2市2町では、
最大**約3,300人**が孤立(1/8時点)



のと里山海道（横田IC～徳田大津IC）



孤立集落への自衛隊ヘリによる支援



輪島港の海底隆起

復興プランの策定に向けて

<石川県令和6年能登半島地震復旧・復興本部>

- 目的 令和6年能登半島地震の被災地の創造的復興に向けた各種の取り組みについて、政府とも連携しながら県庁内の調整を図り推進する
- 設置 令和6年2月1日
- 構成 本部長：知事、 副本部長：副知事、 本部員：各部局長
- 会議
 - (1) 第1回本部会議（令和6年2月1日）
創造的復興に向けた基本方針
 - (2) 第2回本部会議（令和6年3月28日）
石川県創造的復興プラン(仮称)骨子案
 - (3) 第3回本部会議（令和6年5月20日）
石川県創造的復興プラン(仮称)案



復興プランの策定に向けて

<石川県令和6年能登半島地震復旧・復興アドバイザリーボード>

○開催状況

(1) 第1回会議（令和6年3月7日）

(2) 第2回会議（令和6年4月10日）

※会議のほか、委員の専門分野に応じて個別に相談

○委員

※五十音順、敬称略

浅野 幸子	減災と男女共同参画研修推進センター共同代表
安宅 和人	慶應義塾大学環境情報学部教授 LINEヤフー株式会社シニアストラテジスト
今村 久美	認定特定非営利活動法人カタリバ代表理事
小野田 泰明	東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻教授
菅野 拓	大阪公立大学大学院文学研究科准教授
高橋 博之	株式会社雨風太陽代表取締役
太刀川 英輔	NOSIGNER代表 公益社団法人日本インダストリアルデザイン協会理事長
藤沢 烈	一般社団法人RCF代表理事
谷内江 昭宏	金沢大学能登里山里海未来創造センター長
和田 隆志	公益社団法人大学コンソーシアム石川会長



復興プランの策定に向けて

<のと未来トーク>

- 「これからの能登をどうしていくかを、そのまちに住む当事者のみんなで考える」をコンセプトに、被災6市町と金沢市で被災地の住民等の声を聴く対話の場として開催

※アドバイザーリーボード委員もファシリテーターとして参画



のと未来トーク（輪島市）



のと未来 トーク 輪島市

2024.4.7

会場：石川県立輪島高等学校
参加者：75名

一次産業の復興が第一、
水産業の人たちが
戻れるように

大阪から輪島に移
住して和食料理店

を営むも、今は店をあけることができず、金沢へ出稼ぎして
いるという男性も。「輪島は朝市だけじゃない。農業や水産など
1次産業が復興しないと、観光は無理。金沢も輪島漁港に生か
されている。金沢に出稼ぎに出ている水産業の人たちがたくさん
いるので、戻れるようにしたい」と話しました。



門前に 仮設商店街 をつくり
たい

「2007年にも地震があり、2021年にやっと完全復興宣言したと思ったら、3年経たずにこうなった。
總持寺の被害もひどい。また1からやり直し・・・心が折れそうになった」と話す、總持寺通りの
商店街で働いているという女性。それでも、門前に仮設商店街をつくらって店を開ければ少し希望が
できてるかも、と考えているそう。「輪島の中にも様々な背景の地区があり、それぞれの地区にあっ
たまちづくりができたなら」「私も4年前に金沢から育った門前へUターンしたが、金沢に働きの出
ている若者が戻ってこれるようにしたい」と語りました。



「死んでも離れたくない」住民がたくさんいた

（40代・男性）

輪島出身で、Uターンして医師を務めている男性は、絶対に、死んでも（この土地を）離れたくない」と話す住民
たちの声を聞きながら、紛争、戦争レベルの現場で過ごすべきか葛藤してきたそう。DMAT（災害発生直後から
活動できる機動性を備えた医療チーム）も東日本大震災の倍以上となる1000以上のチームを能登へ派遣して
たものの、広域に被害があったため、現場感覚では医療リソースが全く足りていなかったとそう話す。自治体だけで
対応できる規模ではないため、次回以降の災害に備
えた医療インフラの整備の検討が国でも必要ではな
いかと提案しました。

黒瓦の綺麗な街並みを残したい、
けど・・・

（40代・男性）

門前に住む男性は、「街並みが綺麗だ
ねと言われるけど、瓦が重いのでお
家が揺れるんじゃないかという話も地
元ではあり、正直怖い部分もある。
綺麗な街並みを残したいけど、瓦で
潰れくはない」と理想と現実につ
いて語りました。軽量化するなど、
現代にあわせていく必要もありそう
という話が出ました。

目の前で魚をさばける
かつての 朝市

（60代・男性）



「数年前から衛生管理が制度化され、目の前で魚をさばけなくなって出店者が減っていた。でもばあちゃん
がほっかむりを被って、リアカー引いて、包丁でさばいて、というのが輪島の日常。かつての朝市を取り
戻すチャンス」と話す、江戸時代から輪島塗のお店を営む漆器屋さんも。平安時代から物々交換が行われ
ていたり、儲けるだけでなく、みんなで分け合って生きていくというこころの豊かさが流れていた朝市。
「不便で手間のかかるものが残っているのが魅力」「高校生と朝市英語ガイドを復活させるなど、盛り上げ
ていきたい」という声が集まりました。

千枚田、地元の人たちが
修復を

（40代・女性）

世界農業遺産のシンボル・白米
千枚田も、地面に深い亀裂が入
り、大きなダメージが。「景観
を復旧するためには急いで直さ
ないといけない声もあるけど、
未来を考えながら地元の人たち
が時間をかけて修復するのが大
事」という意見が出ました。

どちらか選ぶのじゃなく、
二地域居住できたらいい

（50代・女性）

「他の自治体に二次避難していた若い子達が、先日こっちに帰っ
てきてほんとうにほっとした顔をしていた。地元とつながりがある
と、精神的に安心できるはず。二拠点とて、選択肢を増やして
あげることが大事なのではないか」と話す女性も。行き来のため
に道路の車線増加や空港の増便などのアイデアも出ました。

子どもも大変、学校のみんなが
輪島に戻れる住宅を

（10代・男性）

全校で10人ほどの小さな小学校に通っている11歳の小学生。
「家が傾いたり、子どもも大変。仮設住宅にまだ入れず二次
避難から戻ってこれない子も、早く帰ってこれたら」と発表。
「子どもたちが交流できる場所があればもっと楽しく過ごせ
るのでは」とも話しました。

輪島塗の後継者を増やす
ためにも、オープンに

（10代・女性）

「石川県に住んでいても輪島塗をしたことがない。ぞっ
てみたい。工房もクローズドな雰囲気近寄りづらいが、
もっと制作風景などが見れるようになれば」と話す10
代～30代の若者もいました。



輪島塗は総持寺に全国から修行に
やって来たお大師さんが、全国に持
ち帰って広まったと言われる

飲食関係の経営者からは、「震
災前と同じように復旧しても
しょうがない。新しい事業が生
まれる補助金があるから」「2
013年は、これまでの採算を生
み出すのは難しい。頼りたくな
い気持ちもあるが、雇用調整助
成金なども必要ではないか。事
業再建には雇用を進めない」と
いう声が。

もとに戻すのではなく、
新しい事業の為に補助金があれば

（40代・男性）

保護者世代の女性たちからは、「危ないところばかりで子どもが遊ぶ場
所がない。ストレスを発散する遊び場が必要。家の中では限界がある」「公園や学校など、
子どもの遊び場に仮設が建ってしまった。すぐ建てられる場所はなくしうがなかったた
と思うけど、子どもばかりに我慢を強いらるのでは」という声が上がりました。

仮設住宅を
建ててもいい？
って誰か子どもに聞いた？

（40代・女性）



のと未来トーク（七尾市）



のと未来 トーク 七尾市

2024.4.20

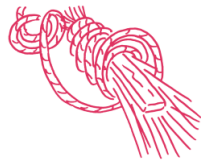
会場：石川県立七尾高等学校
参加者：66名

事業承継 震災前から課題だった

奇楼造りの町家が並び、600年以上の歴史を持つ一本杉通り。しかし後継者がうまく見つからず、閉めるしかないお店が震災前からあったそうです。「震災を機に、事業承継をちゃんと考えていかなければいけない」という声がありました。（40代・女性）

食の力で活気 取り戻したい

（40代・男性）



能登島を忘れさせない

（60代・女性）

島へ渡る2本の橋が通行止めとなり、一時は約2400人の住民が孤立状態になった能登島。農家が多く、芋や野菜を持ち寄ってしのいだそうですが、今も農地がひび割れ、民宿や水族館など観光へのダメージも大きいエリアです。「能登島は忘れられてしまうのでは不安になるが、島が発展するようひとつづつ歩んでいきたい」と話の方も。



関係人口

を映し鏡に、地域の
価値を再発見する

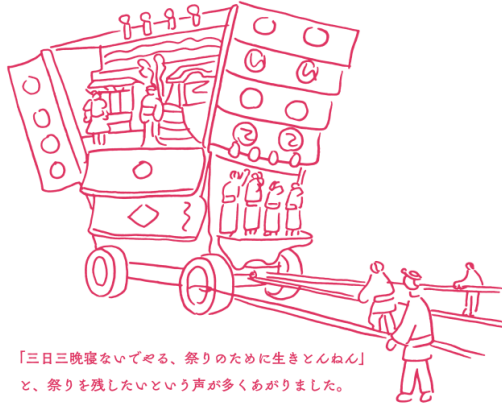
（40代・女性）

県外に住む、震災を機に月1〜2回帰ってきている女性は、ずっと住んでいる人には気づかないことが、外から来てと見えるものの一つ。「外から来た関係人口を映し鏡にして、地域の価値を再発見していくことが大事では」と話しました。

祭りがゼロ回 になるのは嫌だ

（20代・男性）

2024年は中止が決まった、青柏祭の曳山行事（でかやま）。「やることに意味がある。小さくする、でかやま動かさないでも…、カタチを変えてでもやっていく必要がある」



「三日三晩寝ないでやる、祭りのために生きとんねん」と、祭りを残したいという声が多くありました。



「七尾でも漁師はどんどん減っている。儲かる漁業をする人がもって増えないといけない」「能登が一次産業で勝負していくんだったら、漁師が経営を学べるような新しい水産高校も必要なのではないか」という意見も出ました。（30代・男性）

土中環境

を見直して、液状化対策を

（70代・女性）

七尾に生まれ育って75年という女性は、「人間が地面を固めて、地盤が弱くなったのではないが。昔は土中の水の通り道をつくり水を滞留させないことで、建物が倒れにくかったと聞く。地面の上だけでなく、土の中から見直さないと」と話しました。

ONE NOTO, ONE TEAM

大学生も数名参加。「能登では個々に様々なコンテンツがあるが、災害をきっかけに『ONENOTO』としてインバウンドにおける能登ブランドを構築し、稼ぐ能登をつくりたい。自分も地域資源を売っていききたい」「能登の魅力を外国へ発信するプラットフォームを作成中」と話しました。（20代・男性）

奥能登あってこそ和倉

（40代・男性）

4月により多く全域が通水した和倉温泉。旅館業を営む男性も「奥能登があってこそ、和倉温泉も成り立つ。地域を超えて連携していきたい。奥能登のハブになれる宿泊施設が和倉にはある」と話しました。



「片づけた方がいいわいな」と思う

「今朝も、傾いた築100年以上の土蔵の公費解体を申請したいけど、借権者探すのに苦労して…」という相談を受けていた。金銭と雨風、最近漬れた家もあると話す、元教員の女性。エリアごとに被ばくが大きく異なり、田舎など倒壊した家屋や高齢者が多い地域では、みんな戻ってこれるのか不安も大きいという声。（70代・男性）

本音をしゃべれど、心がつらくなる

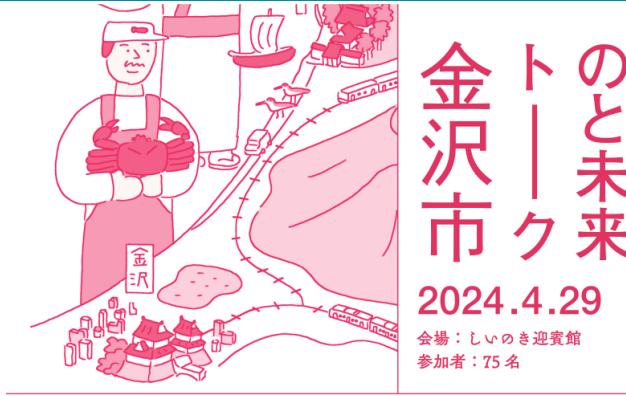
声を出しやすくないだけじゃない

（40代・女性）

声を出しやすくない人がここに来ているが、願を出さないういなど、誰も置いていかないうちくりについて話す人も、少しくも言える人が言っているのが役割分担」という意見もありました。



のと未来トーク（金沢市）



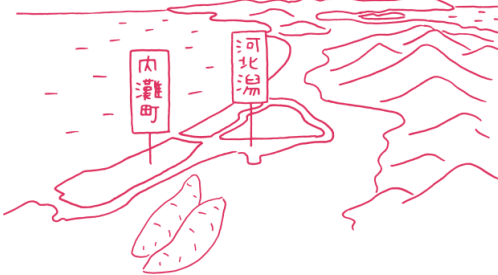
外の人も 家業の継ぎ手に

(50代・男性)

食や伝統工芸など、さまざまな能登のなりわいの事業継続が危がまれている現在。実家で味噌を作ってきた男性は「後継がいなくて困っている。外部の人たちを家業に入れていきたい」と話します。事業相談できる場所の少なさを、そもそもの収益の少なさを課題という声もありました。

震度5弱でも 家が倒れた

(50代・男性)



能登を離れないと決めた

自宅が全壊し、家族を亡くした方も参加。「本当に多くのものを失ったけど、自分は逆に能登を離れないと決めました。必ずまちを復興したい。家族全員が瓦礫の下になったけど、まちの人が助けてくれて命が繋がった。その人たちに恩返しをしたい気持ちしかない」と話しました。(40代・女性)



金沢から家族で遊びに来てもらえる場所をつくる

古民家を買って宿をやる中で被災し、全壊になったという珠洲市の女性。「近所に住んでいた家族は金沢に避難したり引越したりしたが、家族で遊びに来るにもいい場所。絶対にまたあの場所で宿をやりたい」と話しました。(30代・女性)

東京のサラリーマン辞め 帰ってきた

(30代・男性)

実家が輪島の洋服店という男性は、東京でサラリーマンとして働いていたものの、震災を機に金沢に帰り、今は金沢で輪島の二拠点生活をしているそう。「都会に出て、全部自分たちでやるのではなく、外に頼った方がいいことに気づいた。発信を強化していきたい」とのこと。

金沢に 能登のお魚が減ってる

(30代・女性)

「市内の飲食店や近江町市場で、能登産の魚を見かけなくなった」と話す人も。金沢の飲食店は能登からの素材に支えられている部分も大きく、漁港や流通が立ち直っていくことが観光客を呼び込む上でも大事そうです。



骨を埋める人でなく 関連する人 を増やそう

(50代・男性)

金沢で不動産業を営む50代の男性は「住民票はなくとも能登に定期的に開く、関係人口と定住人口の間の『関連人口』を増やせば。空き家を活用した地域ならではの景色をつかって、東京の人に2つ目の拠点として選んでもらえる集落にしたい」と語りました。「骨を埋めないとしても、子どもが大きくなるまで住むのに魅力的と思ってもらえることが大事かも」



母の実家が全焼 金沢から支えたい

「金沢に住んでいるが、母の実家は輪島の朝市で全焼。すぐ行ききたかったが邪魔かと思い、2月に行った。光景がショックすぎて復興なんてできないと落ち込んだ。今はようやく気持ちが落ち着いてきた。住めないとしても、二拠点的に関わりたい」と参加して下さった方もいました。(40代・女性)

聖地巡礼や 修学旅行・合宿の場に

(60代・男性)

万葉集の中で最多の歌を残した大伴家持。「能登には大伴家持が能登國を巡った際に詠んだ歌碑がたくさんある。文学系の聖地巡礼などもできるかも」という案も。地域外からのニーズを増やすために、修学旅行や合宿の誘致をしては」と話す人もいました。

観光客を、 金沢→能登に

(10代・男性)

「通学で金沢駅を使うと、観光している外国人の方をたくさん見かける。彼らに能登まで来てもらう方法を考えたい。食や文化の体験、地元の人との交流などを融合し、魅力的な長期滞在プランを作れないか」と提案する高校生の姿も。



今はまだ、 ゆっくりやりたい

未来に向けて動く周囲に、まだ気持ちが追いつかない人もいます。二次避難の方を含め、「入の命を守る支援は必要だけど、正直まだ未来にいて考えられない。ゆっくりやりたい」「1月1日より前の日曜に戻りたい。今はそれ以上でも以下でもないな」といった声もありました。(40代・女性)

のと未来トークの 子ども版を

(30代・男性)

「子どもたちのまっさらへの思いは大人で結構違う、『マッドナード』を作ったのは子ども・若者に関わるNPOの代表。若い世代の意見は大きい。それがなければ能登は博物館の中の工芸品になってしまふ」と語る10代の男性も。

奥能登100%の暮らし、厳しい気持ちも(30代・男性)「春休みと帰る人もいる中で、言いつけられて、金沢に避難生活で来てみて、奥能登100%の暮らしはもうてきまー、厳しいと感じる部分もある」という声も。子どもが倒壊や街並みを怖がってしまったりして悩ましい、と話すお母さんの姿もありました。

創造的復興に向けた取り組み（施策の4つの柱）

1 教訓を踏まえた災害に強い地域づくり

インフラや施設の早期復旧と強靱化、災害廃棄物の処理促進、復旧事業者や支援者への支援、復旧・復興を通じた関係人口の拡大 など

2 能登の特色ある生業（なりわい）の再建

被災した事業者の早期再建に向けた支援、農林水産業の再建、伝統工芸産業や商店街の再建、観光産業の再建、新たなビジネスの創出 など

3 暮らしとコミュニティの再建

暮らしと住まいの再建、祭りや文化財の再建、文化・スポーツの力の活用、地域公共交通の再建、デジタル活用などスマートな生活の実現 など

4 誰もが安全・安心に暮らし、学ぶことができる環境・地域づくり

医療・福祉・子育て支援体制の充実強化、学びの環境の再建、豊かな自然環境を活かした能登の魅力の向上、被災者・被災地支援の充実、危機管理対応の充実と震災の検証 など

このうち、創造的復興の象徴的プロジェクトを「**創造的復興リーディングプロジェクト**」と位置づけ

石川県創造的復興プラン

(令和6年6月27日策定)



能登が示す、ふるさとの未来

Noto, the future of country

<創造的復興リーディングプロジェクト>

取組 1 復興プロセスを活かした関係人口の拡大

取組 2 能登サテライトキャンパス構想の推進

取組 3 能登に誇りと愛着が持てるような「学び」の場づくり

取組 4 新たな視点に立ったインフラの強靱化

取組 5 自立・分散型エネルギーの活用などグリーン
イノベーションの推進

取組 6 のと里山空港の拠点機能の強化

取組 7 利用者目線に立った持続可能な地域公共交通

取組 8 奥能登版デジタルライフラインの構築

取組 9 能登の「祭り」の再興

取組10 震災遺構の地域資源化に向けた取り組み

取組11 能登半島国定公園のリ・デザイン

取組12 トキが舞う能登の実現

取組13 産学官が連携した復興に向けた取り組みの推進

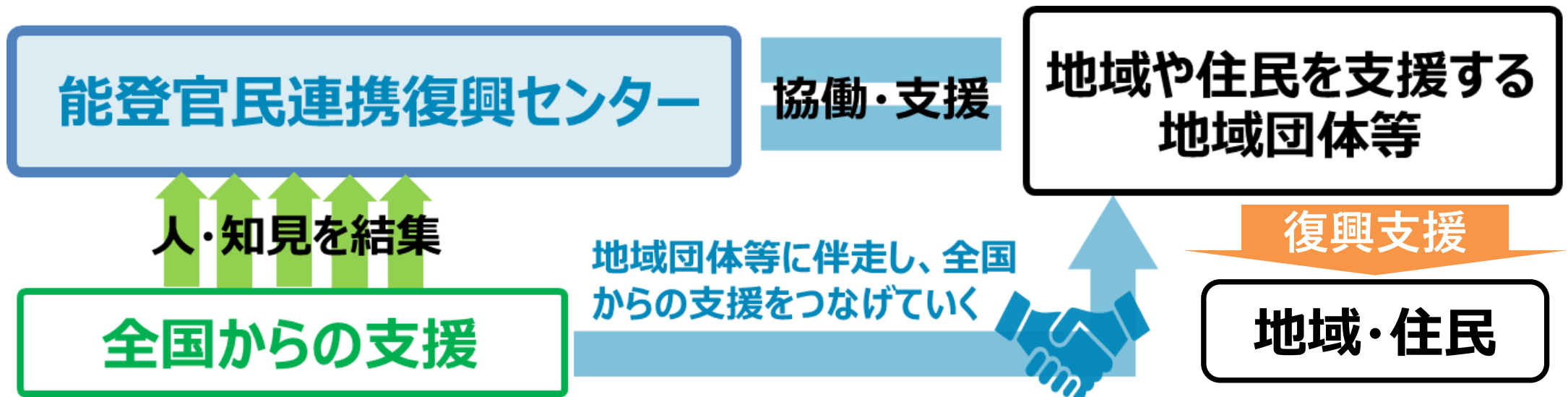
関係人口の拡大に向けた取組の紹介

- 官民連携の「連携復興センター」の設置
- 能登農林水産業ボランティアの実施
- 能登サテライトキャンパス構想の推進
- 能登地域の特性に対応した「二地域居住モデル」の検討

官民連携の「連携復興センター」の設置

- 地域団体等に伴走し、全国からの様々な支援を効果的に結びつけるコーディネート役を担う中間支援組織として、県と能登6市町で設立に向けて準備を進めてきた

「一般社団法人 能登官民連携復興センター」が10月21日に開所



官民連携の「連携復興センター」の設置



能登官民連携復興センター

ロゴマークに込めた想い

官民の連携にかけて「の」と「と」を連結させ、
復興に向けて決して離れない

理事 (◎：代表理事・センター長)

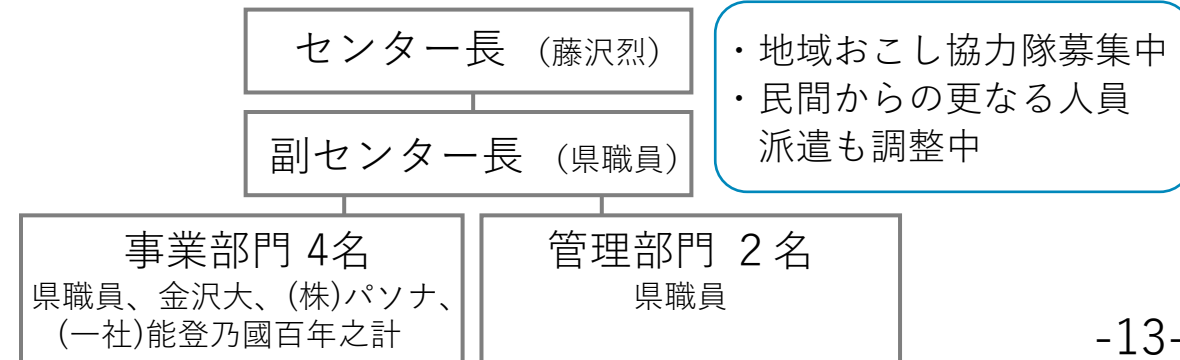
◎藤沢	烈	一般社団法人RCF代表理事
鈴木	正俊	のと共栄信用金庫理事長
田代	克弘	興能信用金庫理事長
谷内江	昭宏	金沢大学能登里山里海未来創造センター長
土岐	祥蔵	石川県能登半島地震復旧・復興推進部長
高橋	実枝	石川県企画振興部長

所在地

奥能登行政センター4階（のと里山空港内）



運営体制



官民連携の「連携復興センター」の設置

目的・事業方針

令和6年能登半島地震からの創造的復興に向け、全国からの様々な支援を効果的に結びつけるコーディネート役割を担い、地域が目指す復興を後押しし、持続的で活力あふれる地域社会の実現を目指す。

1 復興まちづくり支援

被災地域における受援体制の確立支援や、事業者支援に向けた連携、企業による支援のマッチングを進める。

2 生業再建支援

民間の活力を活かした伴走支援により、能登の生業再建を支援する。

3 全国および石川県の外部機関との 連携支援

ノウハウ・人材・資金の不足を解決するため、復興を支える県内外の企業・団体との連携を進める。

4 組織の確立

地域おこし協力隊や、民間企業からの出向・連携、副業によるセンターへの関わりも積極的に進め、組織体制の強化を図る。

5 豪雨災害支援

ボランティアの宿泊先確保や、企業による物資支援等のサポートなどを実施している。

能登農林水産業ボランティアの実施

発災直後から、

- ・ もともと地元の方にお手伝いをお願いしていた作業が、避難等により人手の確保が困難になった
- ・ 本来ならば自分で行えた作業が、地震による水路の土砂の除去等の復旧作業に手を取られて行えないといった声があった。

人手不足を解消し営農再開できるよう、「**能登農林水産業ボランティア**」制度を創設

制度の概要

【主な作業】 農道や水路の簡易な補修、育苗作業（苗運び）、畦の草刈り、倒壊したシイタケのほだ木の整理、カキの種付け 等

【募集方法】 災害ボランティアの仕組みを活用し、毎週、ボランティア事前登録者に対し、メールで活動案内。参加希望者は参加したい受入先を選択し、里山振興室HPから申込み。

能登農林水産業ボランティアの実施

活動実績

310カ所、2,212人を派遣（10月25日現在）



水路の泥上げ作業

（4月26日川原農産 輪島市）



ぶどうの袋掛け作業

（6月29日ハイディーワイナリー 輪島市）



圃場の片付け

（4月23日NOTO 高農園 七尾市）

▶ 「一度参加したことのある受入先を続けて支援していきたい」という声もあり、ボランティア活動を通じた関係人口の拡大にもつなげていきたい

能登サテライトキャンパス構想の推進

多数の高等教育機関が集積しているという本県の強みを活かし、震災以前より、**県内大学と連携**し、世界農業遺産「能登の里山里海」に代表される**豊かな自然や文化**などを活かした**フィールドワークや学生の祭りへの参加を促進**

<これまでの取組実績>

- **地域課題研究ゼミナール支援事業**（大学コンソーシアム石川）
県内市町等が受け入れる地域課題解決型ゼミへの支援
→ 参加学生数：H17～R5 累計 5,367名（402件）
- **能登キャンパス推進事業**（県、奥能登2市2町、県内4大学）
大学がない奥能登での学びの機会の提供
→ 祭りや生業体験への参加者数：H23～R5 累計 1,327名

令和6年能登半島地震発生

長期的な人口減少に対応しながら、能登が復興を遂げるためには、地域に多様な形で関わる「関係人口」の創出を図ることが重要

▶ 「能登サテライトキャンパス構想の推進」を創造的復興プランのリーディングプロジェクトに位置付け、事業を展開

能登サテライトキャンパス構想の推進

- 震災の影響を踏まえた見直しを行うとともに、新たに県外大学も取り込む形で、実施可能なものから順次、事業を展開 《R6.6補正で対応》

地域課題研究ゼミナール支援事業 《拡充》

県内大学と連携し、豊かな自然や文化などを活かしたフィールドワークや地域課題解決等を促進

▶ 能登の復興や災害対応の取り組みの支援枠を拡大



七尾市での出張子ども食堂

サテライトキャンパス事業 《新規》

復興型 (能登)

被災地での災害ボランティアと併せて、地域の事業者や地域住民との交流を促進

《活動実績》 応募者数：35大学 約100名
参加者数：約60名



瓦礫撤去などの復旧作業

一般型 (加賀中心)

フィールドワークを通じて、地域での学びの機会を提供するほか、地元企業でのインターンシップの機会を提供

《活動実績》 参加者数：15大学 約50名



農作業の手伝い

能登地域の特徴に対応した「二地域居住モデル」の検討

石川県創造的復興プラン【抜粋】

創造的復興リーディングプロジェクト

取組 1 復興プロセスを活かした関係人口の拡大

(省略) 今回の震災により人口減少のさらなる加速が懸念される能登において、震災を乗り越え、さらに地域の活力を維持向上させていくには、定住人口や交流人口の拡大に加え、関係人口の拡大を図ることが最重点課題であるといえます。

現在、都市と地方の双方に拠点を構える新しいライフスタイルである二地域居住の取り組みが国を挙げて動き出そうとしています。こうした流れをとらえ、能登全域さらには石川全域で、様々な形で関係人口の受け入れを推進していきます。

また、能登においては、震災により、仕事や育児、教育といった理由により、やむを得ず能登を離れ、能登と避難先での二地域居住となっている方々も多くおられることから、被災者支援としても重要な視点であり、必要な対応を検討していきます。

○ 二地域居住モデルの検討

二地域居住の実施にあたっての課題や能登地域の特徴に対応した二地域居住のモデル構築に向けた検討を行い、関係人口の創出・拡大を目指します。

能登地域の特性に対応した「二地域居住モデル」の検討

検討の視点

① 能登からやむを得ず転居された避難者への対応

能登からやむを得ず転居された避難者について、将来の能登への復帰も見据え、能登とのつながりを維持していくための取り組みが急務。

② 被災地である能登を中心とする新たな関係人口の創出

能登の復興に携わりたいという方が多くおられる中、また、これからも復興の文脈で能登・石川県に関わって下さる方がいらっしゃる中で、そうした方々とつながり、二地域居住を含め、関係人口、ひいては将来の移住者として繋げていくことも重要。

能登が示す、ふるさとの未来 Noto, the future of country

能登は、人々にとっての特別な地です。私たちが当たり前のものと思ってきた能登の美しい自然、そして歴史が培った文化は、世界にも誇れる未来に継承すべき唯一無二の財産です。また能登は、多くの課題を抱える日本にとっての様々な課題の先進地でもあります。

そんな能登に、年の始まるその日に発生した大震災。この痛みと悲しみを乗り越え、これを未来へと続く新たな始まりとしたい。能登が創造的復興を成し遂げ、自然と文化が真に共生する持続的な地域の姿を示すことは、大切な能登を未来に紡ぐだけでなく、日本、そして世界中のあらゆるふるさとの希望の光となります。

能登が持つ自然や文化の普遍的な価値に新たな価値を融合し、全国そして世界から再び注目を集め、理想とされる能登の未来を創り上げることを目指す、という決意を表しています。